



42号の主な内容

- 設立15周年記念シンポジウム
- 設立15周年記念懇親会
- ハビタットひろば 6月1日、8月1日
- ハビタット支援コンサート
- 国連ハビタット福岡本部協力委員会懇談会
- ケニア・ムンザツィ学校支援を!

第42号  
<http://cnhf.web.fc2.com>

■ハビタット福岡市民の会設立15周年記念シンポジウム「若者よ国連を目指せ！」



2014年7月19日(土) 14:00~16:30、ハビタット福岡市民の会設立15周年記念シンポジウム「若者よ 国連を目指せ！」～国際機関で働くためには～を開催しました。

本シンポジウムは、ハビタット福岡市民の会が主催し、日本ハビタット協会福岡支部の協力、国連ハビタット福岡本部の後援と共に、(公財)福岡県国際交流センターの支援を受けました。第一線で活躍されている方々に多大なるご協力をいただき、福岡の次世代を担う青少年のために大いに有益なシンポジウムになったと感じています。

元外務省職員で、久留米大学教授の宮原信孝先生に基調講演とパネルディスカッションの司会をしていただき、パネリストとして九州大学准教授 稲葉美由紀先生、スカイプ中継にて国連ハビタットリビア事務所代表 横田雅之さん、国連ハビタットナイロビ本部 寺田裕佳さんにご協力いただきました。また、当日は、国連ハビタット福岡本部 深澤良信本部長、星野幸代さん、熊谷有美さん、また、この6月に国連ハビタットを退職されたラリス・ランカティレケさんにもお越しいただきました。



会場は、当初の定員100名を上回り約120名、スタッフを含めると140名の来場者で熱気に包まれました。質疑応答の時間も若い方々が積極的に質問され、福岡の若者の意識の高さを嬉しく感じました。また、出演者の方々に、これまでのキャリア、国連で働くことについて、熱くお話しいただきとても勇気づけられました。

宮原信孝先生は、基調講演で、外務省時代、国際機関と協働された時のお話をして下さいました。宮原先生は、「緒方イニシアティブ」で日本政府代表として、アフガニスタン復興計画に参画されたご経験があります。「緒方イニシアティブ」とは、緒方貞子さん



の提言の下に、継ぎ目のない復興を目指し発足した地域総合開発支援計画です。日本政府代表の立場から、その時直面した問題など、国際的なプロジェクト・メンバーとの写真と共にお話しいただきました。



司会の荒田雅子さん

また、宮原先生の外務省時代の同僚で UNDP (国連開発計画) 職員へキャリア・チェンジされた児玉千佳子さんのお話もありました。宮原先生と児玉さんは、もともと外交官としてアフガニスタンに勤務されていました。児玉さんは、アフガニスタンの地で政策とプロジェクト両方を見る立場から開発の仕事をやりたいという意思の下、外務省職員として勤務したアフガニスタンに残り支援を続ける為、自ら採用試験を受け国連機関に転職されました。その後各国の国際機関経験を経て現在は UNDP 職員としてスーダンのダルフールで勤務しています。ダルフールではコミュニティ強化による平和構築に従事しているそうです。国際機関で働くうえでのやりがいは、UNDPではスキームの縛りがないので、包括的な支援、一国の国益から離れた支援ができること、また、国の利害関係、重点事項から離れて仕事ができること。しかし、現実はある程度の困難も多く、現実を受け止めながらも自分の理想を持ち続けることは大変なことなのだそうです。しかし、児玉さんは信念を貫いて今もダルフールで日夜お仕事をされています。

パネリストの方々にもお話ししました。稲葉美由紀先生は、高校時代にコロラド州にホームステイされ、そのまま米国にて大学進学。修士まで政治学を学ばれました。大学院生時代に国連 NY 本部のインターンシップを経験。その後採用競争試験に合格し国連職員として働かれたそうです。稲葉先生は、国連を目指す上で考えるべきは、「自分が何をやりたいのか?何をもって世の中を変えたいのか?」だと仰っていました。〇〇の学問をやると、国連職員になれる、というものではないそうです。なぜなら、国際的組織が、世界の問題解決のために必要とする人材は、その時代によって変わるからです。また、自分が受験するタイミングで受けるポストに空きがあるか、という運の側面もあるそうです。自分の専門分野で経





験と成果を積み、一方国際機関について求人を見るなど常にアンテナを張っておくことが大事だと学びました。お話の中で特に、稲葉先生の「失敗は未成功」という言葉は心に残りました。失敗を恐れずに挑戦する事が大切だと感じました。

寺田裕佳さんも、高校時代にホームステイを1年間する予定が、そのまま米国に残り、大学へ進んだ方でした。大学の寮に住んでいるときのルームメイトから、豊かさの陰に隠れる劣悪な住環境の実態を知り、建築の勉強を志したそうです。大学では都市デザインを専門に勉強されました。国連で働きたいと思ったのは、政策面と現場両方の視点で仕事ができるからです。国連の若手職員を採用するYPP(ヤング・プロフェッショナル・プログラム)試験を受験された際、JPO(外務省の日本人国際機関派遣制度)の存在を教えられ、受験後採用され、今年3月から国連ハビタットナイロビ本部にて勤務されています。現在は、ケニア国内の都市計画に携わっておられます。現地では、法整備ができていない部分もあり、困難も多々あるそうです。しかし、政策を作る立場と、現場で活動する立場両方の視点から従事することはとてもやりがいがあり、また、同僚の方々も、「いい街にするぞ!」という熱意をもってプロジェクトに携わられているので、とてもいい刺激を受けているそうです。国連を目指すにあたって、必要なことを2点教えていただきました。一つ目は、やはり英語の力。そして二つ目は「何がしたいか」を見つけること。都市計画に興味がある方々向けには、国連ハビタットナイロビ本部のHPからEラーニングを受講できる、という情報もお知らせいただきました。



横田雅之さんは、もともとは、国連を目指していたのではなく、将来にわたり、大学で研究することを念頭に、建築と、都市政策について学ばれていました。大学で講師として働くなかで、実務の現場で働きたいという意思の下、国内で首都圏の都市計画のコンサルタント業をされました。しかし、当時は、地域では都市計画を重要視しておらず、営業活動もされていたそうです。その後、国連ハビタットコソボ事務所のポストに応募、コソボは横田さんの出身地岐阜県と国土面積が同じくらいとのことで、運命的なものも感じて、応募されたという余談もありました。コソボでの経験は、日本で働いていた経験が非常に役立ったと仰っていました。都市計画は先進国だとスムーズに行くような事柄も、発展途上国ではなかなか簡単には進まないことがあるそうです。うまくいったときはとても充実感を味わえるし、うまくいかないときは挫折と深い落胆を経験することもあります。仕事にあたり、何かを達成するまでのプロセスを作る能力が問われるそうです。望まれる資質は、自分のやるべきことを伝えることのできる能力と、柔軟性、そして、問題を少しずつ整理して、解決策を講じて施行していくクリエイティブさと、我慢強さ。マニュアルは無く、従事する本人の能力が問われる現場なんだということを痛感しました。あまり決めつけずに目標をもって自分の人生で何を成し遂げたいのかということ意識して生活していくことが大切だと教えていただきました。



また、星野さんにも国連職員になられた経緯を簡単に話していただきました。星野さんは、もともと伝統的な日本企業で働いていて、その後市場主義、実力主義の外資系企業で働いたそうです。阪神大震災の後、兵庫県の大学院で都市政策について学び、関西で活動されていたとき、知人より国連ハビタットの存在を知らされ、履歴書を送ったそうです。イラク戦争後、イラク担当官としてオファーを受けました。星野さんの、多国籍チームで働かれた経験・大蔵省(当時)の役人と折衝してきた経験が買われてのオファーでした。イラクの専門家ではなかったそうですが、イラクについての知識は後から学びながら実務をしていったそうです。

パネリストの方々の方が口をそろえて仰っていた、人生での選択には正解は無く、自分で考え、信念をもって、思った道を進むことが、深く心にのこりました。さまざまな情報が錯綜する中、現代の若者が、自分の人生において突き詰めるものはこれだ!と決めることは、人によっては、困難なのかもしれません。自分は何がしたいのか?何ができるのか?人生の中で、漫然と生活していると見つけにくいのかもしれません。見つけるためには、時間と状況が許す限り、いろいろな場所に行き、いろいろな人と出会い、意見交換をし、そのたびに自分を見つめ直すべきだと感じました。また、雲の上の存在のような気がしていた政府組織や国際機関で働かれている方に、親近感を抱くことができたのは意外で、嬉しく思いました。パネリストの方々も、それぞれの人生の瞬間瞬間で、悩み、考え、勇気をもって決断することの連続の後、現在の場所にいらっしゃるのだな、と感じました。福岡で勉強する若い方々のために、本当に赤裸々にお話ししていただき、とても感動しました。

個人的には、運営から微力ながら携わることで、多くのことを勉強し、また、新しい出会いもあり、自分自身にとって忘れられない一日となりました。(江藤美紗)

## ■設立15周年記念懇親会

設立15周年記念シンポジウム後、アクロス福岡 B2F グランチャイナで懇親会を行いました。シンポジウム参加者のうち引き続き約40名程が参加され、市民の会代表の牟田さんの乾杯の音頭でシンポジウムの盛会と設立15周年を祝いました。

当日は東京から駆けつけて下さった会員もいて、会員同士の久々の旧交を深めるとともに情報交換を行いました。

シンポジウムのパネラー・コーディネータであった宮原教授、稲葉准教授にも参加していただき会を盛り上げていただきました。参加者の中には数人の学生もおり、先生たちの経験・体験談、国連の話に食事を囲みながら聞き入っていました。乳母車の双子のかわいいお子さんはパーティのアイドル的存在として懇親会参加者に可愛がられ、パーティに華を添えていました。

外国と関係する多士済済な人達と出会い、交流を深めることができるというのもこの会の魅力の1つです。アフリカへボランティアに行かれる予定の会員、留学予定の参加者の生の声を聴くことができ、私自身も大いに刺激を受けました。また日本語を流暢に話す外国人留学生の母国事情を聴き勉強にもなりました。

ビュッフェスタイルの美味しい料理と共に、有意義で楽しい時間を過ごせた懇親会だったと思います。

「ハビタット福岡市民の会設立15周年記念シンポジウム」の準備から開催まで代表・事務局長はじめ市民の会スタッフの皆様、お疲れさまでした!(山前隆)





## ■ハビタットひろば

国連ハビタット福岡本部が（公財）福岡県国際交流センターとの合同でアクロス福岡3Fのこくさいひろばで偶数月の1日に開催している合同レクチャーシリーズ「ハビタットひろば」の報告です。

### ■コミュニティの人々と歩んだ40年の軌跡

2014年6月1日（日）、第20回のハビタットひろばが開催され、人間居住分野を約40年間携わってきた国連ハビタット福岡本部ラリス・ランカティレケ上級人間居住専門官による講演がありました。



ラリスさんが約40年間コミュニティの人々とともに仕事をしてきた中で、そこから得た経験や、コミュニティの人々から学んだことを話されました。ラリスさんは大学で建築学を学んだそうですが、現場では大学での知識は無力で役に立たないと述べておりました。むしろ、現場に住んでいる人々の話を聞いて、状況を見定めること。それから、専門家としての知識は一旦捨ててもう一度学び直すというプロセスが必要であると述べておりました。このような過程を経て“People's Process”という手法を作り出したそうです。

ラリスさんは、このようなプロセスを経ることにより、厳しい環境下で生活する人びとでも、知識を持ち機知に富み強い人たちだと気付きました。それから、名もなき大勢の人たちのための建築家、サポートをするプロフェッショナルになろうと決心しました。その後、UNVという国連ボランティアとして中央アフリカのボツワナに赴くことになりました。そこでは、銅山の周りにある無計画な町の、セトルメント（居住区）を改善することになり、現地居住者の求めていることや考えていることと、外部の建築家が考えていることには大きく異なることに気づきました。

その後のスケジュールで仕事をした際には、地図を見て図面上で引いた居住計画というのは全く役に立たないことや、現地居住者と一緒に相談することの大切さに気づきました。そのあとスーダン、現在の南スーダンのジュバという都市に赴き、そこでの優先課題は、居住ではなく水の問題であることと当時のスーダンの状況を述べました。このときラリスさんは紛争地域に10日程閉じ込められた時の経験をお話されました。



それから、ラリスさんの母国であるスリランカの政府の住宅局の副事業部長として、住宅プログラムの責任者として従事することになりました。ここでは、低所得者向けの住宅を100万軒造るというプログラムでした。ここでも、“People's Process”の手法を用いました。この手法が

現在のハビタットの常識的な手法になっています。住宅政策のほかにスリランカの女性銀行を設立した話もされました。しかし、右翼左翼両方のグループにより命を狙われたことによりロンドンに移り、大学で講義をしました。

その後タイ・バンコクに移り国連機関に入ることになり、しばらくタイを拠点としてUNSキャップ（国連太平洋経済社会委員会）という専門機関に勤めることになりました。そこでも、ベトナム、タイ、パキスタン、フィリピン等の国でコミュニティによる住宅政策事業を手がけ、その後、ナミビアが独立国となった直後から、国連ハビタットの現地事務所の責任者として、住宅政策事業に携わることになりました。ここでは“ビルド・トゥゲザー・プログラム”というプログラムで現地の人々と住宅政策を行い、現在では、このプログラムがナミビア政府の正式な住宅政策として採用されています。

それから、南アフリカ共和国へ民主化の転換時期に赴き、白人富裕層と黒人との居住地の融合を行う住宅政策を実施。また、政府の補助金が本来住宅を必要とする人たちに届いていない現状改善のため、住宅アドバイザーとして着任しました。

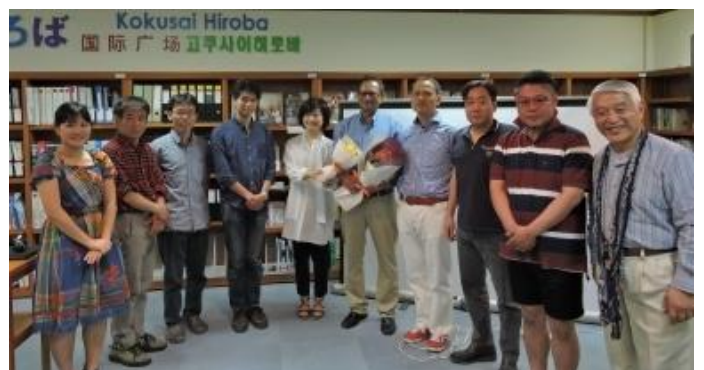
そのあと、バングラディッシュの事務所長として、大規模な住宅改善、貧困削減プログラムに従事することになり、例えば、11の都市において約60万人を対象としたプログラムや、女性たちによる銀行を設立し運営を始めました。

アフガニスタンでは、現地の人々がタリバンに誘拐された時に、ラリスさんがタリバンと交渉し、コミュニティの人々が働きかけたことにより11日後釈放されました。

2004年の12月にインド沖津波地震が発生し、再びラリスさんはスリランカに戻り復興、住宅復興事業をマネージメントすることになりました。それから、“People's process”の手法による、住宅復興、インフラ復興は最も有効な手段と確信したそうです。それから、2006年から現在に至るまで、福岡のアジア太平洋地域本部に勤務し、アフガニスタン、パキスタン、バングラディッシュ、スリランカ等の国の事業を統括していると述べていました。

ラリスさんが40年かけて学んだことは、「人生というのは常に学び続けるプロセスであるということ。永遠に学ぶ過程にあるということ。をきちっと理解することが出来れば、人生に対して前向きになって夢を追うことが出来る。」ということです。また皆さんへのメッセージとして、「学ぶことを楽しんでほしい。怖がらないで、無視しないで学び続けてほしい。学ぶ上で一番大事なことは、常に謙虚でい続けることだ。読み書きできない人でも謙虚に学ぶ気持ちがあれば、そういう人たちの声を聞くことが出来る。」と述べていました。また、「言葉が通じないということは、コミュニケーションのバリアではありません。本当にそういうひとたちとコミュニケーションしたいと思えば、その人たちの目を見て、心で会話をしようと思えば、必ずそれは通じます。言語が通じないもの同士でも友情は生まれる。」と例をあげてお話しされました。最後に「パキスタンにおいても、地元のリーダーの1人と、字を書くことも出来ないし、話すこともできないにも拘らず、彼の親友のひとりになれました。謙虚な気持ちを持ち続けて、そういう人たちの声を聞くことが出来れば、あなたも、学び続けることが出来るのだと思います。」とのメッセージで、現役最後のラリスさんの講演が終わりました。

（前田直樹）





## ■福岡の雨水利用技術でラオスに安全で安定した水を

2014年8月1日(金)第21回ハビタットひろばが開催され、国連ハビタット福岡本部長の深澤良信さんの挨拶及び本部長補佐官の星野幸代さんのラオスの概況説明の後、(株)大建(福岡市に本社を置く建設会社)の松尾憲親社長と同プロジェクトリーダーの河野新司さんにより、ラオスにおいて雨水を利用した安全で安定した水の供給事業について講演がありました。



(株)大建が技術開発した雨水貯水地下タンク「ためっと」とは九州大学との共同研究で実現した砕石層と埋戻土を使った埋設型の画期的な雨水を貯める仕組みです。貯めた雨水は飲料水並みの水質で、トイレの洗浄水や植物への散水などに利用できます。施工が容易で工期が短くコストが安く出来ます。また豪雨の際に治水の役割も果たします。

ラオスでは、乳幼児死亡の約30%が不衛生な水が原因とされる。「ためっと」を、ラオス最南部のアトゥー県タム村とブーサイ村で小中学校の敷地に実際に事業を実施しました。このプロジェクトは、国連ハビタットが2008年より実施している「いのちの水」事業キャンペーンに寄せられた浄財で実施するもので、今回の予算は約350万円です。

(株)大建の技術及び現場指導のもと、国連ハビタットラオス事務所水と衛生チーム、自治体水道局、自治体選出による地元の大工、石工によ



って、地下雨水集水タンクを建設します。地元の技術力向上と自力による拡大も目指し、地元の資材と道具を利活用します。ラオスでは砕石の代わりに、それより安い川砂利を使用しました。水質は飲んで美味しいと言われるほど高く出来ました。この講演は、大変分かり易くまた、国連ハビタットの活動状況がよく分かりました。質疑応答も活発に行われました。大変よい講演会でした。(佐竹芳郎)

## ■ハビタット支援コンサート

7月16日(水)19:00より毎年恒例のニューヨーク・シンフォニック・アンサンブルの演奏会がありました。

当コンサートは、チケット売り上げの一部が国連ハビタット福岡本部の支援に充てられます。

当日の天気は雨が降ったり止んだり、直前には大雨が降って、人の入りが心配されましたが、約1500人の方が演奏を聞きに来られました。

今回の曲目はなじみのある曲が多く演奏されました。ただ私はベートーベンの交響曲第8番はなじみがありませんでした。ソナタ・スケルツォ・メヌエットから成り立つとても古典的な曲に思われました。久しぶりのクラシックコンサート、自分が異空間の中にタイムスリップして、とてもよい時間をすごすことが出来ました。来年はどのような曲が聞けるか楽しみです。(大坪優美子)

## ■国連ハビタット福岡本部協力委員会懇談会

例年に比べると多少涼しく心地よい気候の6月19日(木)夜、県知事公舎庭園にて「国連ハビタット福岡本部協力委員会懇談会」が開催され、今年も当会より会員が参加しました。

国連ハビタット福岡本部の方々を中心に、国連ハビタット親善大使のマリ・クリスティーン氏、協力委員会会長の松尾新吾氏、小川県知事、貞刈副市長など国連ハビタット福岡本部を支援する素晴らしい方々が揃いました。

また、この日は長年に渡り国連ハビタットで活躍されたラリス・ランカティレケ氏の退職日でもありました。市民の会も、非常にお世話になったラリス氏には深く感謝の意を表すと共に、長年の労をねぎらい思い出話に花を咲かせました。さらには、協力委員会会長を務めてこられた松尾新吾会長も引退され、新協力委員会会長に津上賢治氏の就任発表と挨拶もありました。

九州で唯一の国連機関である「国連ハビタット福岡本部」は本当に九州の誇りであり、九州のさまざまな方の支援の元にあると改めて思いました。(野田修司)



市民の会メンバーと、小川県知事、深澤本部長、ラリスさん、マリ・クリスティーンさん

## ケニア・ムンザツィ学校支援を!

昨年9月に市民の会のスタディツアーで訪れた、ケニア西部のムンザツィ村の学校の衛生環境改善事業を日本ハビタット協会福岡支部とハビタット福岡市民の会の募金活動により支援することになりました。

トイレの給水設備や浄化設備を整備し衛生問題を改善するのに、年間60万円、5年間で300万円を予定しています。多くの人々が1日1ドルの生活をしているこの地域の子どもたちが学校生活を元気に楽しく送り、より良い未来を創造していけるようご協力をお願いします。詳しくは同封のチラシをご覧ください。

## 事務局・お問い合わせは

郵便物のあて先は:

〒838-0134 小郡市下西郷坂 1493 牟田慎一郎宛

お問い合わせは:

TEL: 090-6770-2481 (牟田)

FAX: 0942-41-2080

E-mail: muta@ktarn.or.jp

Facebook: ハビタット福岡市民の会

HomePage: <http://cnhf.web.fc2.com>

